

原著

指導主体としての保育士・幼稚園教諭のキャリア形成に関する研究（1）

—職業観とジェンダー観に関する心理的葛藤を中心に—

A study on the career design of the childminder and kindergarten teacher as a
guidance agency（1）

—Focusing on psychological conflict regarding workplace view and gender view—

玉木 博章

愛知県みずほ大学(非常勤講師)

Hiroaki TAMAKI
Aichi Mizuho College

Abstract.

In this study, I will clarify how childcare persons recognize their work and how they are made use of their recognition in their own career development based on qualitative research. In previous studies on childcare person's career formation quantitative surveys mainly targeting students are carried out. However, in this study, I aim to obtain clues to solve the problems pointed out in the previous research by clarifying the psychology of the childcare person which can't be indicated by such quantitative survey. Therefore, in this paper, while placing emphasis on the positioning of the whole study, the contents of the survey shall be partially specified

This article is a three-part composition. In section 1, I summarize the preceding research, clarify the tasks derived from it, and set hypotheses. In section 2, I show the contents of the qualitative survey conducted for the two childcare persons. The subjects to be interviewed were asked to speak freely about life design including views on work and marriage. In section 3, I show the summary of this paper and the challenge to the next article. In particular, I describe the necessity to conduct survey research focusing on diverse gender views.

キーワード：保育士、幼稚園教諭、指導、キャリア、ジェンダー

Key Word : Childminder, Kindergarten teacher, Guidance, Career, Gender

1、問題の所在と研究の意義

1-1 保育士と幼稚園教諭のキャリア意識に関する研究

保育士と幼稚園教諭（以後まとめて保育者とする）の職業観や労働者としての意識、人生設計に関する先行研究のなかでは、主に女子学生を対象にした量的調査がこれまで実施されている。例えば坪井敏純は実習体験を基に、それがどのようにキャリア形成に活きるのかを調査している（坪井 2017）。また勝井陽子は、保育者として働くことのできる職場は保育園等以外にも多く存在する¹が、それらの施設に対する知識を学

生が得る機会は保育士養成課程に入ってからであり、これらの施設に対する学生の理解が不足していることを明らかにしている（勝井 2016, 35-37）。そして向田久美子はジェンダーの視点から、保育者を志望する女子短大生の人生観や結婚観、職業観を明らかにしている（向田 2015）。向田によれば、保育者養成校の短大生の多くは、ケアの担い手が主に女性である家庭で育ち、ヒューマンサービスとして保育者の道を選び、やがては家庭でのケア役割の中心となることを想定しつつ、配偶者にはケア役割と稼ぎ手の双方を期待して

いるとされている（向田 2015, 27）。

そして先行研究者達は、自身の行ったものを含め様々な量的調査を保育者養成上でのキャリア教育に役立たせようとしている。例えば松尾由美は、高い離職率を指摘しつつ、保育士の早期離職を防ぐために、デートプランを立てることで予測不可能な自体に対するキャリアプランニング能力を養うというユニークなキャリア教育を提案している（松尾 2017, 21-22）。また前述した坪井は、実習体験での課題を踏まえて、自分が望んでいない職業選択をしようとしている学生に、どのように就職支援すべきか言及している（坪井 2017, 102）。そして勝井は、96%の学生が、良く知らない施設での働き方についてもっと知りたいと回答しており（勝井 2016, 37）、未知に対峙した学生の中に、知りたい、学びたいという極めて積極的な主体性が存在する点に、将来の職業、キャリア形成に向かう意欲や主体性を見出している（勝井 2016, 38）。

1-2 保育者養成におけるキャリア教育の課題

このように先行研究者達は学生の現状を把握しながら、それを学生のキャリア形成にどう反映させていくか試行錯誤し、同時にその点を重要視していることがわかる。勝井も、保育士養成課程での科目を展開する中でキャリア教育、職業教育についての視点は、その後の人生におけるキャリアデザインにも大きな影響を与えうる（勝井 2016, 29）と述べている。

こうした取り組みに関して向田は、保育者養成校としては保育現場への就職だけを目的とするのではなく、学生が一人の人間として長い人生をどう生きていくのか、将来起こる可能性があり、それにどう対応していったら良いかを見据えたキャリア教育を実施する必要がある（向田 2015, 27）と、先述した松尾の重視するキャリアプランニング能力の育成（松尾 2017）にも通ずる旨を述べる。だが勝井は、短期大学の保育士養成課程における学生は現在そのほとんどが保育所もしくは幼稚園といった就学前の保育に在籍した経験を持ち、保育者の具体的な行為、労働環境、社会的環境等、その職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を身に付けていなくても、保育者という職業観を形成するための要素は既に経験していると述べる。したがって保育所等において社会人・職業人として働く自己イメージの形成が可能であり、そのため学生の多くが短期大学に進学以前に就職の選択を完了している（勝井 2016, 34）と現状を指摘する。そうであるならば、固定的な学生達の意識をどのように変えていかも課題の1つとして捉えられよう。

他方で、どの論者も警鐘を鳴らしている早期離職率の高さも課題の1つとして挙げられるだろう。保育者

養成校の卒業生を対象にした遠藤知里ら（遠藤・竹石・鈴木・加藤 2012）の調査でも、卒業後5年で3割が退職していることが示されている。また森本美佐ら（森本・林・東村 2013）の調査によれば、就職後3年未満の離職者が見られた施設は調査対象となった146施設中63施設と半数近くを占めており、早期離職の問題はどの施設にも存在し、解決が求められると言えよう。しかしながら先述した松尾はこのような現状に対して補足を加える。前述した松尾は、とりわけ卒業後間もない保育士の早期離職の原因は、給与や長時間労働等の処遇面での不満よりも、職場の人間関係に関する問題の方が大きいと示唆する。そして雇用条件だけでなく、職場の人間関係が早期離職の大きな原因の1つであるとするならば、賃上げ等処遇改善により早期離職問題が解決するとは考えにくい（松尾 2017, 19）との見解を示している。加えて、人材不足のため即戦力が求められる中、職場の高過ぎる期待に苦悩する新任保育者の姿や、職場が保育者としての資質が足りない新任保育者をどう育てればよいか戸惑い、人材育成に失敗し離職者を生み出している姿が想像される。したがって、早期離職を防ぐためには①新任保育者自身が職場に定着し保育者として働き続けられるための支援と、②職場が新任保育者を育てるための支援の2つが不可欠である（松尾 2017, 19-20）と言及する。

翻って学生を対象にした向田の調査では全体の約75%の学生が、いかなる形で再就職するか、もしくはしないかに拘らず、結婚や出産での離職を希望している（向田 2015, 22）。だがそうした結婚や自らの育児優先のために現場を離れたと考えている学生が多いものの、現実的には結婚ができないもしくは子どもを授かることができない保育者がいることも真である。希望して独身でいる者もいるであろうが、保育学生達が結婚そして出産を望んでいる一方で、それが不可能になりつつある現状が日本社会にはある。向田も統計を基にしながら今後は更に未婚化や晩婚化、少子化や雇用の流動化が進むことが予想されおり、学生が期待するようなライフコースを辿れる確率は低く（向田 2015, 27）、学生の親世代には当たり前とみなされていた「結婚して、子育てをする」というライフコースだけを想定していたのでは、結果として不本意な人生を送ることにもなりかねない（向田 2015, 21）と別の課題を述べる。

1-3 課題に対する仮説と考察

ここまで先行研究を基にしながら課題を3つ挙げてきたが、調査を実施する前に3つの課題に対して考察を示しておきたい。1点目である学生の知識拡充や3点目の予測不可能な未来への対応に関しては、今後の

キャリア教育の方針を改善することで対応可能であるだろう。しかしながら2点目の離職率の改善に関しては、先行研究に対して批判的な知見も見出される。そもそも保育者志望の学生達が、将来休職後に復帰するかしないかは別にして、就業前から自らの育児等のために保育現場から離れることを希望している（向田 2015, 22）のであれば、高い離職率を示す現状は自然な兆候である。実際に卒業生を対象にした今井調子らの調査でも、離職の理由として「結婚」が第1位に挙げられている（今井, 川村, 漆澤, 黒江, 松本, 橋本, 田中 2013, 24）。そうであるならば、給与のアップや人間関係の改善は広域でなされるべきではあるが、その旨の対策をしても離職する保育者は一定数現存し続けることを含意していることになる。加えて、松尾が指摘する（松尾 2017, 19-20）ように、いかに離職させないかを念頭に置いた職場作りやキャリア教育に取り組むことも重要ではあるが、いかに復帰しやすいか、そして復帰することにメリットを感じられる職場環境作りや社会創造そが必要になるのではないだろうか。換言すれば、保育者志望の学生達が自らのキャリア形成上、一度辞めることを念頭に置くという人生設計をしているにも拘らず、単に仕事を続けることを是とし、仕事を辞めることを否とするような、正社員礼賛型のキャリア教育をすることは合理的とは言えないのではない。むしろそれは非合理的と言うより、強制労働を推進する洗脳教育にもなりえよう。

確かに保育士の離職率の高さは改善すべき点ではある。しかしながら向田によれば保育業界の就職率の高さはこうした離職率によって支えられている（向田 2015, 21）ため、実際に離職率が低下すると反って学生の就職や、潜在保育士達の復職が困難になる可能性もある。つまり先行研究者達が、こうした研究を基に職業の継続や主体的選択のためのキャリア教育への連結だけを示唆しているのであれば、問題の本質は離職する保育者達だけに収斂させられ、保育者やその関係者を取り巻く人々の QOL を向上させるための視野を狭小化させることに繋がってしまう。したがって保育業界における離職は悪であり、改善すべき点であるという知見を批判的に俯瞰できるような視野の拡大や柔軟性を含意したキャリア教育を行うことで、学生の知識拡充や予測不可能な未来への対応へと繋がることが示唆できる。

1-4 本稿の位置づけと研究全体の見通し

では、実際の保育現場で働く保育者達はこのような現状や課題をどのように捉えているのだろうか。そして、そうした現状を自身のキャリア形成にどう関連させているのだろうか。当然、既述した先行研究や仮説は、

子ども達を指導する立場である保育者達が子どもを指導する一方で自らをどう指導してキャリア形成をしているかという問いを明らかにする上での貢献度は高い。なぜなら自らの指導を通して子ども達を見るという往還的な指導が、結果的に保育者としての力量形成にも大いに寄与するからだ。森光義照も、教師としての資質を高めていくためには自分の生き方について自分自身が問えるようにならなければいけない。つまり、「自分の生き方は何か」、「生きる姿勢とは何か」という命題を自分に課して、自分の教育観・人生観・職業観が語れるようにならなければならない（森光 2005, 33）と述べる。また田中まさ子も、子どもへの指導を通して中堅保育士がどのようにキャリア発達をさせているのか研究している（田中 2011）。

だがこうした研究は、既述したようにキャリア意識等に関する量的調査に限定されており、卒業生を追跡した調査等はあまり存在しない（向田 2015, 21）。また管見の限りではあるが、そうした現在就業中、もしくは就業経験のある保育者を対象とした質的調査も同様に存在しない。現在の保育情勢を鑑みれば、子育て支援と現状把握の一環として今後は自治体規模での量的調査は実施される可能性はあるだろう。そこで本稿では、先行研究から導き出された学生の知識拡充、離職率の改善、予測不可能な未来への対応という3つの課題を解決する手がかりを得るためにも、質的調査を通して、量的調査では抽出不可能な保育者達の心理を明らかにしていくことに価値を求めたい。したがって、本稿は保育現場で働く保育者を対象に、自身のキャリア形成をどのように考えているか、そして考えていたかを質的に調査する。

2、調査の手法と内容

2-1 調査に関する詳細

今回は自身のキャリア形成に関して、その中に現れる職業観やジェンダー観に関する保育者の心理を明らかにするため愛知県内で保育者として勤務する女性を対象としている。調査は、保育者の心理や様々な事情を明らかにすべく半構造化インタビューの形式をとった。筆者らの知人を辿って、できる限り多くの保育者にインタビューを行い、そして現在もそれは続行している。これ以前に調査を行ったサンプル等もあるが、本稿ではまず2名のインタビュー内容を掲載し、今後別のインタビューイに関して次稿以降で随時示していく予定である。

調査及び分析を行う上で、対象が愛知県に限られている点、またサンプルの年齢的偏りや無作為抽出ではないという点は考慮すべきだが、そもそもこうした質的調査が先行研究に存在しない点を鑑みれば、これら

の調査は今後の研究材料として蓄積できるだろう。

詳細や質問等は以下の通りである。

実施時期：2018年2月

実施人数：2名

実施対象：保育者としての勤務経験を持つ者。

記録方法：ICレコーダーを使用。

質問内容：保育者としての仕事やキャリア、職場環境についてどう考えているか。また結婚、出産、労働も含め、今後どのように人生を過ごしていきたいか語ってもらった。

なお調査対象のTはインタビュアーである筆者を示している。分析においては、インタビュイーの発言は、ある程度インタビュアーの存在に影響されている可能性も考慮に入れて分析する必要がある。またTの口調がインタビュイーによって変化しているが、特にAさんとは10年来の親しい間柄なので、他のインタビュイーに比べてラポールが形成されている。

2-2 30代前半Aさんに対する調査

Aさんは現在31歳。結婚して第一子を妊娠中である。保育系の短期大学を卒業後、私立保育園に保育士として勤務し、その後は介護士に転職し、結婚後介護士を続けたものの、しばらくして再びパートの保育士として働いている。(2018年2月5日20時から1時間程度実施)

T：妊活をするために介護の仕事辞めたと聞いているけど、それは何で？

A：たまたまかもしれないけれど、特養（特別養護老人ホーム）で働いててもなかなか子どもできなかったし、先輩が2回流産してたし。自分より体の重い人を抱えたりするのも体に負担かな、って思ったから。もちろん保育園で働くのも流産の確率はあるけど、子どもと触れ合ってる方が妊娠しやすいかなあと。友達も、保育士しながら妊娠してる子の方が多かったこともあって。

A：介護士の労働形態、例えばフルタイムかパートか、あとは夜勤の有無とかもそうした選択に関係しているの？

A：体質によるかもしれないけれど、夜勤とかやっていると旦那とタイミング合わせずらいだろう。関係はあったかな。

T：結婚後も夜勤やってたの？それから結婚後もフルタイムで働いてたの？

A：結婚する前は夜勤やってたけど、結婚してからは日勤態で働いてた。早番とか遅番とかはあったけど

ね。8時間勤務してた。

T：結婚して旦那さんに合わせるために夜勤辞めたの？パートではなくて毎日8時間働いてたん？

A：旦那の希望で夜勤をやらない準正規で働いてた。パートとして月給貰ってて、月21日くらい働いてたかな。

T：月21日ってほぼ正規社員じゃん。準社員と正規社員は何が違うの？夜勤の有無？あと、旦那さんの希望を聞くのは嫌ではなかったの？給料減るし、もっと働きたいとか、それこそ結婚したんだから将来のためにお金が必要とか。

A：準と正規の違いは夜勤の有無だね。あと、時間給のパートさんもいたし。色んな人がいたなあ。確かにボーナスはだいぶ減ったけど、給料は少しちがうだけだった。旦那の希望は嫌じゃなかったよ。夜勤してたらすれ違いとかもありそうだし、働いてた特養は夜勤が2日連続だったから。あとね、私は子宮筋腫もあったから子どもできにくいつてのがあって。それもなかったかな。結局検査したら体には問題なかったからタイミングの問題だっただけなんだけど。

T：つまり給料減っても大丈夫だった、それくらい旦那さんが稼いでるからってこと？あと、旦那さんは家事を手伝ってくれてる？

A：男性の平均給与がいくらかは知らないけど、多少は大丈夫だと思う。家事は手伝ってくれてるよ。仕事は色々大変みたいだけど。

T：なるほど。では、何でもとも当時介護に転職しようと思ったの？短大での勉強が無駄になるよね？

A：1番の理由は、働いてた保育園を辞めたくて、辞める理由が欲しくて介護士を目指したんだよね。あと、お祖父ちゃんに介護が必要になってきて、自分が勉強して親にアドバイスできればって思ったから。保育科を卒業してれば、当時は1年で介護士が取得できたから。だから短大での勉強は無駄になってないよ。介護の現場でも保育でやってたこと活用できたし。

T：ってことは、学校に行き直したんだ。当時いくつだったの？短大と同じところ？

A：専攻科に通ってたのは6年くらい前だから25歳かな。介護福祉専攻は県内に3つしかなくて。愛知学泉と柳城短大と、愛知文教女子短大かな。独学でも取得できるけど、卒業と同時に取得できる方がよかったから。保育とは違う〇〇³に行ってた。

T：短大ってどこだったっけ？辞めるのは不安じゃなかったの？25歳で無職になるわけだし。それと、何で保育士辞めたかったの？

A：保育短大は〇〇⁴だよ。そこで保育士取って、卒業後に夜間の専門学校行って幼稚園教諭2種免許も取った。保育士辞めたのは、お局のパートに嫌味言われ

て辞めたかったから。辞めることに関しては不安は無かったよ。介護も保育も人手が足りない仕事だから就職先はあると思ってたから。

T: 単に職場を変えて保育士を続けるって手もあったのに、何で転職したの？お祖父ちゃんが大きいの？それと、無職の期間はお金とかどうしてたの？あと、何で短大出てから幼稚園教諭も取ろうと思ったの？

A: 最初は短大でも幼稚園教諭取れるって言われたけど結局取れなくて。私1期生で、結局短大の手続きがどうこうとかで2年後からしか無理だったんだよね。取るつもりで入ったから、いつか役に立つかなって思って、若いうちに勉強しようと思ったんだよね。転職は、お祖父ちゃんと保育園辞めたかったって2つが大きいな。介護士を1年で取得できる期間が当時もう終わるって言われてたから、最後のチャンスと思って介護福祉専攻に行ったの。学校通ってる時はバイトしてたよ。

T: え、でもそれって短大側の不備でしょ？なのに更に学費払って資格取るとかおかしくない？いきなり人生設計狂ってるし。

A: だから私の友達は四大に編入して取ってたよ。幼稚園教諭は、取れるかも、って話だけで、取れる資格一覧には載ってなかったから。仕方ないかなって。

T: 納得してるならいいけど、それ友達とかも普通に大学側に振り回されてるね。

A: 確かに。専門行ってなければその期間は正規として働いてただろうしね。最初の2年は臨職として固定時間で働いてて。保育園なら幼稚園教諭無くて正規として働けるけど、資格を優先したって感じかな。

T: それでよかったの？専門行くなって決めた時、つまり卒業してるのに正規として働かないって決めた時はどんな心境だったの？引け目とかなかったの？

A: なかなか就職先が決まらなくて。だから専門で幼稚園教諭取ろうかなって。夜間の専門なら昼間は保育園でバイトできるの知ってたし。ある意味、逃げ道にしたのかもね。

T: 四大に行けばよかったとは思わなかったの？

A: 働きたかったから。四大は思わなかったな。保育士は小さい頃から目指してたから。

T: なるほど。わかる気がする。そういえば、ずっと実家暮らしなんだっけ？親は保育士辞める時は何も言わなかったの？家って割と余裕あるの？

A: (幼稚園教諭の) 専門学校と専攻科は自分のお金で行ったよ。保育園で働いてた時に貯まったお金で行ったから。親は反対しなかったよ。結婚するまではずっと実家にいたし。

T: 学費高くない？

A: 学費はもう記憶にないけど。私立だからそれな

りにしたと思う。資格取って、保育園変えるのも1つの手かなくて思ったけど、せっかく介護士取ったし、違う仕事もしてみたくてさ。

T: 辞めたかったところにお祖父ちゃんが転職だったんだね。保育士の仕事に飽きたの？

A: 飽きてはいないよ。今も保育士してるし。でも、書類が多すぎて嫌になったんだよね。外から見たら、保育園の先生って子どもと遊んでるだけって思われがちだけど、書類や制作の準備とか色々やることあり過ぎて。

T: 確かに子どもの世話だけじゃないからね。それは働いてから知ったの？あと、お局には何を言われたの？

A: 働く前から実習とかで知ってたけど、書類は思ったよりも多くてね。お局には同僚を通じて、辞めるように言って欲しいって言われたことがあって。それを園長に言っても対応してくれなくてね。

T: え、何やったの？そこまで嫌われる？

A: 園長の息子に私が気に入られていて、それが気に入らなかつたのと、ちゃんと書類を仕上げられなくて。

T: 息子に気に入られてたなんて凄じやん。お局は独身だったの？息子っていくつ？付き合えばよかったのに。

A: やだよ。むしろ私嫌いだったし。お局は結婚して子持ちで、子どもの接し方が、よく違うよって言われて。注意されたけどどうしたらいいか教えてくれなくて。わからなくて。

T: お局はいくつくらい？息子は？独身？

A: お局は当時アラフォーくらいかな。息子も40過ぎたかなりのおっさんで。独身。息子は園バスの運転手やってて、誕生日にケーキくれたけど、生理的に無理。

T: なるほど。じゃ、最後に1つ。転職考えた時に結婚とかのことをどう考えてたの？今の旦那さんと会ったのはもっと後だけど、ここで転職したら婚期遠のくとかなかったの？

A: 旦那と会ったのは専攻科に通ってた時で、転職しようとした時はフリーだったから、結婚とか全然考えてなかった。

T: いたらどうだった？

A: いたら違ってたかな。わかんないけど。

T: 確かに、もしいたら結婚するから転職せずに我慢して、辞めればよかったって感じ？

A: 彼氏がいたとしても、彼の年収によっては働いてたかな。子どもができるまでは働きたかったから。

T: 今の旦那さんで良かったね。結婚の決め手は？

A: 付き合ってたって飽きる事がなかったから、かな。

それまでは長くても5か月とかだったけど、今の旦那が一番長く付き合ったし。私からプロポーズしたけど。

T: すごいね。旦那さんは何人目の彼氏なの？すぐプロポーズ受け入れてくれたの？

A: うん。すぐだったよ。旦那は、4人目だったかな。

2-3 20代後半Bさんに対する調査

続くBさんは現在27歳。今年結婚して子どもはおらず、現在も短大卒業後に就職した保育園に保育士として勤務している。(2018年2月7日20時から30分程度実施)

T: 旦那さんとはどこで出会ったんですか？どれくらい付き合っ、結婚の決め手は何だったんでしょうか？

B: 同窓会で会って、しばらくしてから連絡を取るようになった感じかな。3年付き合っ、付き合うには物足りないけど、結婚するならこんな感じの人って思ってたし、タイミング的にも良かったから。

T: 高校？中学の？向こうから口説かれたんですか？

B: あっちからきっかけはくれた感じかな。小学校だよ。

T: 結婚するならこんな感じってのはどういうことですか？

B: うーん。感覚的な部分でもあるしな。

T: 例えば、めっちゃ好きって感じないけど、結婚ってそういうのじゃなくて、みたいなの？

B: そう！そんな感じかも。

T: プロポーズされたんですか？

B: そりゃ向こうからですよ。さすがにプロポーズは男の人からされたいよね。

T: なるほど。ちなみに短大卒業後もずっと同じ園で7年働いてるのは何ですか？

B: 単に転職する勇気がなかつただけかもしれないけど。うちは割と給料貰えてる方みたいだから、そんなに不満ばかりってわけでもないよ。

T: 確かに名古屋市は保育士の給与水準は全国トップレベルですからねえ。

B: そうそう。市外の友達に聞くとやっぱり低いもんね。

T: なるほど。給料も含めて居心地は良かったんですね。

B: そうだね。私は居心地悪いとは思ってないかな。なかには悪いって感じてる人もいるかもだけど。

T: 7年もいると立場は変わりますよね？そういう点はどうですか？

B: 後輩が入ってきて指導する立場になるけど。私が入って3年してやっと後輩が1人入ってきて、私は幼児の担任だったりでタイミングが合わなくて一緒に組むことがない状態が続いて、今年初めて後輩と組んでるんだよね。この仕事はマニュアルがある訳じゃないし、保育観って人それぞれ違うから、自分より下の子には危険の無い範囲のなかで自分の保育観を活かした保育をして欲しいなとは思っただけど、クラス主任の先生は割と自分の保育観を押し付けるタイプの人だから中間的な立場の身としてはなかなか難しく。実際今年の新人の子は主任と合わなくて年度途中で退職しちゃったし。

T: 新人退職ですか。でもとてもプロフェッショナルな見解が聞けてありがたいです。

B: どうしても合う合わないがあるだろうから。合わない時はホントに地獄だと思うよ。この仕事だと人間関係で悩む人多いんじゃないかなあ。

T: ちなみに今後の仕事についてはどう考えていますか？

B: 今年度で退職予定です。

T: え、それは何ですか？好きな仕事ですよ？

B: いや、もう十分かな、と。子どもはかわいいし好きだけど、そこまで続けたいとは思えないかな。結婚してもバリバリ働いてる人って沢山いるけど、私は結婚したら専業主婦として家のことを自分の満足するまで頑張りたいなあ。それに正社員よりパートの方が融通利くし、この先の生活を考えると便利かなって。

T: そんなもんなんですかね。辞めても大丈夫なんですか？旦那さんの給料とか。お仕事何されてるんですか？専業主婦が夢なんですか？

B: 自分の親がそう(専業主婦)だからかな。多分大丈夫かな、(旦那は)会社員だけど。

T: 親の影響なんですね。何となく納得しました。でも、この御時世に専業主婦を許容できる旦那さんはすごいですね。

3、本稿のまとめと今後の課題

3-1 インタビュー内容の考察

サンプル数に限りがあるが、一度この範囲内で仮説の検証を試みたい。AさんやBさんの語りから見られるのは、やはり結婚と子育てを中心とした人生設計であった。先行研究の量的調査結果にあるように、多くの保育者が自らの職業キャリアよりも結婚や出産を重視している。そしてそれに伴って正規職員として働き方を見直しを希望する者もいた。実際Aさんは妊活のためにパート職員として保育者に復帰し、Bさんは結婚後に専業主婦になる。特にBさんに関しては、母の影響であったり、パートナーとの収入も総合的に考

えて専業主婦を選択している。つまり、家計収入が減少することを理解していて専業主婦というという選択を肯定的に行っている。これらは彼女達が自らの QOL 向上のために望んだキャリア設計であるが、こうした語りを基にすれば、やはり仮説に示したように離職することが一様に悪であり、それを防ぐべきだという知見が狭小的な観点しか持ち合わせていないことがわかる。彼女達のような保育者に離職させないことを薦めるようなキャリア教育を行ったり、彼女達の選択を非難することが是とされるならば、保育者達の人間としての幸福が議論の枠内から抜け落ちてしまう。まして B さんを見れば、キャリア教育によって専業主婦になることによって家計収入が減少することを強調したところで、既に理解しているのだから、それは的外れな教育であると言える。森光が、一般的に1つの職業に就くということは言うまでもなく単なる経済的な要件を充たすためのものではない(森光 2005, 31)と述べているように、職業を持って働くということが生活全体のなかで持つ意味は多様であるし、しないこともまたキャリア設計の1つである言えよう。

しかしながら A さんが言うように、結婚は相手がいるのであるため、相応しいパートナーがいない場合には、そうした選択肢と関係なくキャリア形成をしていく反面、B さんに見られるように結婚に見合ったパートナーを積極的に模索していく場合もあるようだ。こうした人生設計の違いは、それまで過ごしてきた恋愛経験における自己肯定感やジェンダー観が大きく影響するのかもしれない⁵。

他方で A さん B さん共に保育者として仕事に対しては独自の拘りも見受けられる。それゆえの A さんと上司との衝突であるし、B さんも後輩のことに関して自らの保育観を述べている。森光が、1つのことに真剣になり、自分自身の職業や教育に対する信念を持たないと一生懸命さは子ども達に伝わらない(森光 2005, 31)と保育者達のキャリア教育に懸念を示しているが、本稿の2人はむしろ真摯に仕事を全うしようと努め、子どもを通して自らを指導しようとしているように見受けられる。しかも A さんに至っては多様なキャリアの展開を模索し、それを実現している。こうした心理は予測不可能な未来への対応が出来ていると判断できるし、それに必要な知識を得ることが学生時代にできずとも、それを得るための素となる資質を獲得していたと言えよう。

3-2 次稿への展望

本稿では研究の位置付けに重きを置き、紙幅の関係上サンプル数の限定もあったため、簡易的な考察に留まった。だが以降では2名を追跡しながら、現在進行

中の新たなインタビューへの調査もまとめ、一定のサンプル数が集まったところで比較分析をしながら総合考察を行う必要がある。

またそうした総合考察に向けては新たな視点も必要となる。例えば向田は、保育現場に様々な世代や男性の保育者が増えれば、子どもにとってもロールモデルの多様化に繋がり、メリットがあると思われる(向田 2015, 27)と述べている。だがその研究対象は女子学生に限定されている。また、そこに LGBT を始めとする多様な性モデルに関する記述も無い。本稿での調査対象を含めて、保育者を対象とした研究がなされる折には女性に限定されがちであるし、そうした男女の枠組みを超えた対象にも随時調査をしていく必要があるだろう。

そして仮説で示した3つの課題のうち、1点目と3点目を解決するための授業方法についても考案していかなければならないだろう。

参考文献一覧

今井, 川村, 漆澤, 黒江, 松本, 橋本, 田中 2013 : 今井調子, 川村博子, 漆澤恭子, 黒田静江, 松本和江, 橋本三枝子, 田中幸. 卒業生への就業継続支援に関する調査研究. 植草学園短期大学紀要, 第 14 号. 21-25.

遠藤・竹石・鈴木・加藤 2012: 遠藤知里, 竹石聖子, 鈴木久美子, 加藤光良. 新卒保育者の早期離職問題に関する研究 2 —新卒後 5 年目までの保育者の「辞めたい理由」に注目して. 常葉学園短期大学紀要, 43 号. 155-166.

勝井 2016: 勝井陽子. 保育士養成課程におけるキャリア教育・職業教育に関する考察. 北翔大学短期大学部研究紀要, 54 号. 29-39.

田中 2011: 田中まさ子. 保育者は子どもの学びをどう捉えるのか—中堅保育士のキャリア発達の視点から—. 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要, Vol.43. 85-102.

坪井 2017: キャリア形成に及ぼす保育実習体験と就職支援の課題. 鹿児島女子短期大学紀要, Vol.52. 97-102.

向田 2015: 向田久美子. 保育者養成学校におけるキャリア教育—男女共同参画の視点から—. 駒沢女子短期大学研究紀要, 第 48 号. 19-30.

松尾 2017: 松尾由美. 保育士の早期離職を防ぐためのキャリア教育—キャリアプランニング能力の育成を目的とする問題解決シミュレーションの提案—. Informatio: 江戸川大学の情報教育と環境, Vol.14. 19-22.

森光 2005: 森光義昭. 幼児教育に携わる教師の基本理念. 近畿大学九州短期大学研究紀要, 35 巻. 23-38.

森本・林・東村 2013: 森本美佐, 林悠子, 東村知子.

新人保育者の早期離職に関する実態調査. 奈良文化女子短期大学紀要, 44. 101-109.

¹例えば乳児院、児童厚生施設、母子生活支援施設、福祉型障害児入所施設、医療型障害児入所施設、福祉型自児童発達支援センター、医療型児童発達支援センター、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設がある。これらの児童福祉施設は各施設種別に社会的機能が異なり、利用対象やその社会的背景及び要因、支援ニーズは千差万別である(勝井 2016, 35)。

² 卒業後の希望する働き方に関する調査結果において、就職せず 0.8%、就労継続 21.9%、その他 3.4%を除いた、結婚退職してその後は働かない 1.3%、結婚退職してパート復帰 17.7%、結婚退職して正社員復帰 3.8%、出産退職してその後は働かない 3.8%、出産退職してパート復帰 33.8%、出産退職して正社員復帰 13.5%の約 75%が離職を希望している(向田 2015, 22)。

³ 個人情報に該当するので、〇〇とした。どの教育機関であるか、筆者は認識している。

⁴ 同上。

⁵ AさんとBさんを比較した場合、BさんはAさんに比べて自分がパートナー候補から選ばれる経験を多くしてきている。したがってあくまで仮説であるが、Aさんに比べてBさんは結婚することにハードルを感じておらず、適齢期になれば自分は相手を決めるだけと考えていた可能性もある。翻って自らプロポーズしたAさんは、そうしなければ結婚そして出産ができないという懸念があったとも見受けられる。どちらも主体的に結婚しているが、その主体性の内容が異なり、こうした結婚に至るプロセスには個々の経験から得られるジェンダー観が反映されているように見受けられる。「プロポーズは男がするものだし、されたい」という発言を踏まえればBさんがいわゆる典型的な女の子であり、Aさんはそうではないだろう。が、あくまでこれは仮説であるため、本論からは除外した。別稿でデータ等を基にして詳しく論じたい。